



天野進吾が視る。語る。今日のできごと。まつりごと。

ホームページをご覧ください <http://www.amano-shingo.info>

どう県民の負託に答える。

川勝県政の船出!

5日の静岡県知事選挙の開票結果は、将に「薄氷」と形容できるほどの接戦を制し、静岡文化芸術大学前学長・川勝平太氏が当選しました。

自由民主党の前参院議員・坂本由紀子候補は、立候補の声明が僅か1ヶ月前と、「押っ取り刀」の準備に翻弄されてきました。その上、中央政界では昨年来の党内ゴタゴタ劇の継続によって自民党支持率は通減していったのであります。

更にこの知事選が「衆院選の前哨戦」と報道機関に持て囃され、坂本候補にとっては終始「自民党推薦」の看板が災いをもたらしたのであります。

一方、川勝氏の場合も、「夢あるしずおか創造会議」の出馬要請に対し「100%出馬の意思なし」と記者団に発言、その結果、10数名の心ある自民党県議の心を放擲してしまつたのであります。また静岡県民にとって、川勝氏の現住所が「軽井沢」であった事も最後まで崇るなど「準備不足」の誇りを免れなかつたところでした。

今回の知事選は久しぶりに多数の候補者に

よる戦いであれば県民の関心も高く、投票率も61%を越えました。これは昭和49年の七夕豪雨の渦中に行われた知事選(山本対永原)に次ぐ激しい戦いでありました。

その結果、僅か15000票の僅差で接戦を制した川勝平太新知事には、選挙期間中に見せた進る情熱を、山積する県政の課題に真正面から取り組んで戴き、県民の期待に応えて頂きたいものであります。

殊に6日の記者会見では早速に「搭乗率保証」の見直しを提言しておりますが、云うところの「走りながら」の行政改革に期待致します。

私のホームページからの抜粋

エッセイ「衣川の戦い」

遙か昔の、しかも漠然たる記憶の中であれば、思い違いもあるうかと思ひ、埃にまみれた書棚から久方ぶりの歴史書を引っ張り出し、「衣川の戦い」を調べました。

高校時代、日本史の授業の中で得々として衣川の戦いの件を語る先生の言葉を聞きながら、

「証詮、後世の人間の作り話」と嘲笑しながらも和歌の趣旨に関心を抱き、この31文字を記憶しておりました。

「年をへし糸の乱れの苦しさに、衣の盾は綻びにけり」

「衣川の戦い」は11世紀の源氏全盛の時代、即ち「前九年の役」において源頼義・義家父子が奥州の豪族安倍氏を討伐した際に誕生した逸話・・・義家は敗走する安倍貞任を追いつつ、その背に向けて大声で「衣の盾は綻びにけり」と「下の句」を叫んだのでした。すると流石の貞任、間髪を容れず、「年をへし糸の乱れの苦しさに」と「上の句」を詠ったとの事であります。

しかし如何に歴戦のつわものとは云え、馬上でそんな風雅なゆとりはあるう筈がありません。それにも関わらずこの場面を得意気に語る先生の言葉は、日本人の判官鬚も手伝い、何時しか私の脳裡に深く刻まれ、半世紀を経たのであります。

処が近頃は、この場面を想像するにつけ、滅亡直前の豪族・安倍家と年を経して凋落する自由民主党の姿が重ね合つてしまふのであります。

一本当にどうなつてしまふのでしょうか――



駒形周辺を探る

江戸・吉原の生みの親「二丁町」

私達のような年をとった生粋の静岡市民ならば、「駒形」の地名を聞けば、そこが嘗ての歓楽街であり、更には歴史ある遊郭の町と連想する事でしょう。しかしその代表的地名が「二丁町」ですが、それが何処にあったのか今では殆ど知られておりません。更にまた、この「二丁町」が東京の吉原、即ち遊郭の代名詞ともなっている「吉原」の生みの親であったことも知られておりません。そこで先ず、駒形通り5丁目にある「双街の碑」を訪ねました。

1605年、將軍職を秀忠に譲った

家康は何故か「駿府」を隠居の地と定め、築城や道路・橋梁などの事業を天下の諸藩にその賦役を命じました。こうして全国各地から妻子を残して集められた男達は僅かな遊女屋では女の奪い合いなど喧嘩・口論が絶えなかったのです。

そこで家康の家臣であった伊部嘉右衛門(勘右エ門)の申し出に家康はこれを許可、京都の遊郭を真似たとも云われておりますが、凡そ1万坪の土地を一〇七丁に分けて遊郭を建設したのでした。

家光の時代になって、急速に衰退する駿府とは逆に、江戸は都としての機能を整える一方、参勤交代の常態化などによって街の様相を一変するものでありました。

殊に駿府の場合と同様、ここでも男

手を必要とする建設・土木作業が繁忙為に近郊から集められた男達の性欲の解消の場として、江戸の片田舎「吉原」に駿府の遊郭のうち三〇七丁を移設するところとなったのであります。その結果一・二丁の遊郭を総称して「二丁町」との呼称で昭和20年の静岡空襲まで存在するところとなったのであります。

「双街の碑」とは二丁の町という意味であり、ここに「二丁町」があったことを表わしております。

一寸一言 私の雑記帳から

「男子の本懐これにすぐるものなし」

6月16日、石川県知事は本会議場の壇上から「16年の歴史を振り返りながら」静かに別れの言葉を述べたのでした。

最後に座す私は四半世紀(お付き合いは石川氏が県教育次長時代に遡る)に及ぶ友情をもって知事の最後の言葉に全霊を傾注して聞いていました。

その折、私の脳裡に浮かんだ送別の言葉は表題に示した「男児の本懐これにすぐるものなし」の言葉でした。

今日の複雑な社会機構の中で、確かな足跡を地域社会に残しうる者など、極めて稀有なことでありませぬ。勿論、知事自身の生れもった才覚と資質が官僚として、更には県知事として確実に所を得、その結果、本県の県政史に「石川時代」を刻んだのであります。

「若し」は歴史を考える上では無意味でしょうが、率直に云って、若し「静岡空港」の計画が石川知事の就任時に存在してい

なかつたなら、少なくとも現在地での空港はなかつたでしょう。

否、空港ばかりでなく、斉藤前知事時代に企画された大規模事業がその後の石川県政に大きな「足枷」となっていたことは想像に余りあるところです。

もとより2兆円を超える公債費用の存在は自治官僚であった石川知事には決して脳裡から払拭し得ない課題であつたと確信するものであります。

正直、私は後ろ髪を引かれる思いで県庁を去る石川知事に心からの感謝を込めてここに「惜別の言葉」を送ります。

夏祭りで、日本の魅力再発見



夏はお祭りのシーズン。地域の花火大会や夜店市を心待ちにしている方も多いことでしょう。“東北三大祭り”、“四国二大祭り”と言われる大規模なお祭りも、すべて夏に開催されます。最近では旅行を兼ねて、各地の大きなお祭りを訪ねる方が増えているようです。豪華絢爛な「仙台七夕まつり」、東北最大の「青森ねぶた祭」、豊作を祈る米どころ秋田の「竿燈まつり」。街全体が熱気に包まれる徳島の「阿波踊り」、高知の「よさこい祭り」。

それぞれのお祭りには、その土地ならではの郷土色が色濃く表れます。言葉や食べ物、気質、風習。自分が暮らす地域とは全く異なる雰囲気の中で、日本という国の奥深さや多様性を実感することができます。

「日本国内ならいつでも行ける」とは言うものの、メジャーな観光地を除くと、家族や親類のいない土地には意外と出かけるチャンスが少ないもの。夏祭りは、まだ知らない日本の魅力を再発見する、いい機会になるのでは？

『天野進吾』の歴史講座

町内会の集会、サークル活動などに天野進吾を呼んでみませんか。大変ありがたいことにこのSHINGO-SCOPEの郷土史が好評を頂いております。どうぞ、お気軽にお声掛けください。